

EUIJ スカラシップ・レポート

松澤祐介

一橋大学院経済学研究科博士後期課程（現：桜美林大学経済学部非常勤講師）

市場経済移行国の銀行部門の展開

私は中・東欧諸国の市場経済化について、金融制度、金融政策面から焦点を当てた研究を行っている。

2004年5月1日、チェコ、ポーランド、ハンガリー、スロヴァキア、スロベニアの中欧5カ国とバルト3国がEU加盟を果たしたが、各国が加盟交渉を通じて欧州委員会から「機能する市場経済」として認められたことは、中・東欧諸国が社会主義から市場経済への転換において一定の到達点に至ったことを示したものであった。

もっとも、市場経済化は大きな困難を伴うものであった。旧東独での失業問題、ロシアでの猛烈なインフレや通貨危機の様子は、ニュース映像で記憶している方も多いことであろう。中・東欧諸国でも、各国間での程度の差こそあれ、様々な経済体制移行に伴う問題に直面した。

そうした中で、「優等生」と見なされていたのがチェコである。エコノミストでもあった首相クラウス(Václav Klaus、現大統領)の下、1990年代半ばには、低いインフレと失業率、比較的高い経済成長率と安定した固定為替相場制の維持、国民への「クーポン」交付を通じた国有企業の急速な私有化などによって、チェコ流の市場経済化は国際機関などからも高い評価を得ていた。

しかし、1997年半ばに通貨危機が発生、折からの与党の政治資金疑惑もあってクラウスは首相を辞任し、その市場経済化路線は挫折した。景気も1997年から98年にかけてマイナス成長を記録し、物価はデフレ傾向を鮮明にしていく。

クラウスは自由主義を標榜する一方、欧州懐疑論者(euroskeptic)としても知られ、EUの経済統合に対しては、その経済的諸規制に批判的であり、チェコのEU加盟申請が他の中東欧諸国の後塵を拝したほどである。そのクラウスに率いられたチェコにおいて、なぜ市場経済化は行き詰まったのだろうか。

その答えの1つを、私は市場経済移行期の銀行部門の展開に求めた。チェコでは市場経済化当初、競争促進の狙いもあって銀行の参入障壁を低くするなど、一見自由主義的政策をとっていた。しかし、社会主義時代から存在した大手銀行については部分的な株式売却による私有化に留め、融資を通じ、非効率な経営状態にある(旧)国有企業を支える装置として機能した。増嵩する不良債権には当局の度重なる救済策が取られ、低失業率に示されるように、経済体制移行のショックを緩和させていたのである。このような経済構造は「銀行社会主義(bankovní socialismus)」とも揶揄され、銀行部門のモラル・ハザードを助長するものとなり、その矛盾は、散発的に露呈していた中小銀行の破綻、そして、1998年~2000年にかけての大手行の銀行危機として表面化していく。

一方、チェコスロヴァキアから分離したスロヴァキアでも、ポピュリスト的なメチャル(Vladimír Mečiar)政権の下、「痛み」を伴う改革は先送りされていた。チェコ同様の金融部門と企業間の構造は、チェコ以上に銀行危機を深刻化させていく。しかし1998年の政権交代後、大銀行は早々に外資に売却されるなど、市場経済化はむしろ急速に進展した。危機の深さゆえ、問題の解決はチェコよりも抜本的に実施された、ともいえ、同じスタート地点にあった同国を比較対象とすることは、チェコの市場経済化を評価する上で有効な研究手法となる。

このような問題意識を基に、2004年10月~11月にかけて、EUIJ スカラシップを利用して、チェコ、スロ

ヴァキア、及び、伝統的に中・東欧諸国の経済研究の中心であるオーストリアの、関係当局、金融機関、研究機関・研究者を訪問し、資料収集とインタビュー調査を行った。

チェコでは、中央銀行（ eská národní banka, CNB ）にて資料収集を行ったほか、一橋大学経済研究所に由来懇意にさせて頂いている、元 CNB 経済研究所長クラツェク博士(Dr. Jan Klacek)を訪問した。博士からは私の問題意識に対するコメントや研究へのアドバイスを頂戴し、また、日本・チェコ両国に共通していた「デフレ」現象について意見交換を行ったほか、週末はポーランドにほど近い博士の別荘に招待を受けるなど、滞在中は公私共々御世話頂いた。また同博士の紹介で、チェコ銀行協会（ eská bankovní asociace ）のエコノミスト・クROIヘル氏（Jaroslav Kroiher）を訪ね、各種資料の提供を受けた。さらに、大手銀行 2 行（ eskoslovenská obchodní banka, eská spo ělna ）とコンタクトをとり、経営状況の資料として、それぞれの年次報告書を入手した。

スロヴァキアでは、私自身としては 2 度目の訪問となる中央銀行（ Slovenská Národná banka, SNB ）広報課のミハリコヴァー女史（Eva Michalíková）の御助力により、SNB の年次報告書やスロヴァキアの銀行制度・金融政策関連の資料を提供頂いた。

オーストリアでは、ウィーン世界経済研究所（Wiener Institut für internationale Wirtschaftsvergleiche）において、関連資料の収集を行ったほか、一橋大学経済研究所に所歴のあるハブリーク（Dr. Peter Havlik）副所長と中・東欧諸国の経済体制移行、銀行制度の発展に関する意見交換を行った。

短期間ではあったが、この一連の訪問を通じて得た知見、情報を基に、帰国後に私の所属する比較経済体制学会にて、「市場経済移行期のチェコにおける銀行危機の展開」として報告を行い、コメント等を踏まえて、同学会年報・第 42 巻 2 号に論文として公刊した（興味を持たれた方は、<http://www.soc.nii.ac.jp/jaces/422matu.pdf> よりダウンロードされたい）。

2004 年という、チェコとスロヴァキアが EU 加盟を果たしたまさにその年に、EUIJ スカラーシップの第一期生として調査研究訪問の機会が得られたことは、私にとっても EU の東方拡大の恩恵を受けたかたちになったが、一層の研究と研鑽を通じ、我が国での中・東欧諸国の理解を深める役割を担うことで、EUIJ、そして滞在中に訪問させて頂いた方々への学恩に報いていくこととしたい。